

## 詩人・村松武司における朝鮮とライ文学

森田 進

はじめに

日本近・現代文学史において、言語最高芸術であるはずの詩歌は、つねに傍流視されてきた。かなり知られている詩人であっても、かれらの魂の表現である詩集は、なかなか手に入らない。

今回取り上げた村松武司にしても、日本現代文学研究者の間でさえ、その業績にいたっては、ほとんど知られていないだろう。ゆえに、この小論では、武司の文学的営為の紹介を兼ねながら、その独自の、しかも決定的な示唆に富む問いの投げかけの意味を追ってみようと思う。

端的に言えば、武司が投げかけた問いとは、日本人にとって朝鮮とハンセン病（ライ）とは何であったのか、そして何でありつづけているのか、である。が、今回はとくに武司がにじり寄りつづけたライ文学に焦点を絞る。武司は、日本のライ文学史を構想していたかもしれ

ない。しかしそれは手つかずに終わった。それよりもライ文学の本質とは何であり、それがわれわれにどのような意味をもっているのかを、武司の人生の切迫した問題として取り組んだのである。これは、武司の友人でありかつ師ともいふべき大江満雄から引き継いだ問題意識でもあり、現代文学のみならず、現代日本人の課題でもあるのだ。

### 第一章 略歴

村松武司（一九二四～一九九三）。

翌年一九九四年八月二八日の命日に、本人のほぼ遺志通りに、『海のタリヨン―村松武司著作集』（皓星社）が刊行された。

以下、著作集の「村松武司年譜稿」（黒川洋作成）から、朝鮮と文学とハンセン病に関わる部分の一部を紹介するが、補筆させていただいた箇所もある。題名の『海のタ

リヨン』の「海」は日本と朝鮮を引き裂き、かつ結びつけている朝鮮海峡を指している。なお、「タリヨン」は朝鮮語であり、漢字では「打鈴、打令」であり、己れの身の上喩を節をつけて歌うように語ることである。

一九二四年（大正十三年）七月、村松真太郎の次男（姉兄、妹二人、弟）として朝鮮・「京城」（現ソウル）に生まれる。祖父村松武八（父方）、浦尾文蔵（母方）から数え三代目の植民者であった。三八年四月、京城中学校入学。四三年三月、京城中学校卒業。四四年秋、「京城」にて召集され京城二十師團入営。十二月 朝鮮・満州・ソ連国境（咸鏡北道阿吾地）に電探兵として従軍する。四五年八月、京畿道仁川の郊外松島の電波兵器士官学校にて敗戦。十月、一家で下関に引き揚げる。

四六年上京。三月、『純粹詩』、『新日本文学』、四月、第一次『コスモス』創刊。四八年九月、『造形文学』創刊。大江満雄に初めて会う。四九年十二月、現代詩人会発足。大江満雄を訪れる。この年日本共産党に入党する。五十年九月、結核発病咯血、十月東大病院入院。五二年三月、『列島』創刊同人。五六年十一月、石川三四郎の葬儀で秋山清、鶴見俊輔、岡本潤、上村諦と出会う。五七年二月、詩集『怖ろしいニンフたち』。六十年五月、

詩集『朝鮮海峡』。六二年、『亜細亜詩人』（大江満雄編集）参加。『朝鮮研究』に「朝鮮植民者」連載開始。

六四年十一月、井手則雄の後を引き継ぎ、ハンセン病療養所・栗生楽泉園の「栗生詩話会」「高原」の詩欄の選者となる。（井手は大江満雄の後を引き継いでいた）。

七二年三月、評論『朝鮮植民者―ある明治人の生涯』。七三年三月、栗生楽泉園詩話会合同詩集『くまざさの実』編集解説。七五年夏・高史明と楽泉園を訪れる。七六年五月、楽泉園の歌人・古川時夫の歌集『身不知柿』解説。この年、自ら「ライと朝鮮の文学」を出版すべく梨花書房を設立。七七年五月、詩集『祖国を持つもの持たぬもの』。七九年三月、楽泉園の小林弘明詩集『闇の中の木立』解説。評論集『遙かなる故郷―ライと朝鮮の文学』。八十年十一月、栗生詩話会合同詩集『骨片文学』編集解説。八二年六月、藤楓協会三〇周年にあたり感謝状を受ける。八三年五月、『新井徹の全仕事』共編解説。九月、楽泉園の韓国人、香山末子（キム・マルチャ）詩集『草津アリアン』解説。八五年六月、楽泉園の越一人の詩集『違い鷹羽』解説。八八年十月、楽泉園の藤田三四郎の詩集『方舟の櫂』解説。十一月、楽泉園の桜井哲夫の詩集『津軽の子守唄』解説。八九年一月、小林弘明詩集『ズボンの話』解説。

一九九〇年十月、朝鮮民主主義人民共和国訪問。九一年四月、大江満雄の詩碑「四万十川」建立を祝うため高知県中村市に妻、栄子とともに旅行。七月、香山末子詩集『鶯の鳴く地獄谷』解説。十月、大江満雄逝去。九二年六月、沼津市の明石海人文学展で講演。八月、韓国を遠望する対馬に栄子と旅する。栗生楽泉園・開園六〇周年祭。楽泉園の加藤三郎の詩集『僕らの村』解説。九三年三月、長く編集・校閲にたずさわった『海人全集』全三巻刊行。八月二八日逝去。

長くなったが、村松武司が、朝鮮と詩文学とライに、いかに深く関わっているか、察知していただけることと思う。なお、大江満雄（一九〇七〜一九九一）は、明治以後、ハンセン病詩人たちと真摯につきあつた最初の非ライ者詩人である。武司にとっては、韓国と朝鮮民主主義共和国の区別はなく、あの半島全体が朝鮮であり、しかも植民地とされた朝鮮全体の意味と現在の私との関わりのみが思想的な課題なのである。だが、大韓民国の土を再び踏むことはなかった。なお、武司は、ハンセン病という医学的な名称に変更されたことによって、差別されてきた患者の歴史が抹殺されてしまうことに抗議をこめて、カタカナ表記の「ライ」に執着している。

## 第二章 朝鮮とライ

では、朝鮮とライは、どのように結びつくのであろうか。朝鮮植民者の三代目である武司は、日本の近代化が犠牲にしてきたものを生い育った朝鮮で目の前に見つけてきたのである。そして帰国後一貫して、朝鮮とライの意味を詩人として問い続けて行く。武司にとって、日本の近代化は、いわば楕円形である。二つの原点によって成立した近代化である。しかもその二つの原点、すなわち朝鮮とライは、見えないというよりは、日本の近代化のサクセス・ストーリーの背後に抹殺されてきたのである。

この問題に鋭く切り込んだのが、『朝鮮植民者―ある明治人の生涯』（一九七二）と『遙かなる故郷―ライと朝鮮の文学』（七九）である。

### そのⅠ 「朝鮮植民者」の世界

これは、母方の祖父、浦尾文蔵の口述自伝を孫の武司がまとめた本である。文蔵は一八七三年（明治五年）、下関生まれ。一八八二年（明二五）、文蔵と妻イセ等朝鮮に入植、母文代入植地で生まれる。そして一九六二年（昭三七）九〇歳、別府で他界するまでの波乱万丈の生

涯であった。武司は、植民者という自覚のなかった日本人の意識構造にこだわり、「植民者」という概念を提出することによって、朝鮮人にとっての朝鮮と、日本人にとっての植民地・朝鮮が、いかに遠い存在であったかを描き出す。

冒頭「この本の読者へ」の中で、武司は、

(文蔵は) うさんくさい植民者の一典型であったといつていいだろう。／その祖父が、朝鮮を愛そうとしながら自分を裏切つていく過程を、わたしは正直に記してきた。／略／多くの植民者がいたにもかかわらず、いまその記録が近・現代史から欠落している。このまま放置すれば彼らの歴史は失われてしまうであろう。彼らを眠らせてしまうのはかまわないが、日本の現代の意味をつかむために、たいせつな歴史の支流を無視することになりはしないか、とおそれる。この支流には、アジアの近・現代史のなかで、日本はどのような存在であったか、という日本の相貌が映されている。たんに植民者を「帝国主義的な侵略者たち」というのはやさしいが、それだけでは、われわれ自身、ひいては日本の民衆自身もどのような姿をしていたか、肝腎な像が虚像に変わってしまった。／略／ここでわたしが意図するのは、祖父の歴史と

わたしの現在とを区別しないこと。過去を過ぎ去ったものとして葬らず、ふたたび墓場から引き出すことである。したがって、これは日本の過去の植民史ではない。現在の植民主義的状况を示す。

と書いている。

では、とくに示唆に富んだ部分を引用していく。

朝鮮においては、日本人で乞食はいなかった。馬車を引く人も荷担人もなかった。この当然で奇妙な現象こそ、やがて後に敗戦を境に引揚げを迎えるにあたって、日本人の総引揚げという奇妙な現象に重なり、符号してくるのである。／略／なんの抵抗もなく、朝鮮・「満州」など植民地から引揚げたのは、世界でただ一国、日本の植民者だけではなかったか。われわれのなかで、植民主義者はいた。植民者もいた。しかし「植民地人」だけは生むことはできなかった。だからこそ、いつせいに植民地を捨てることができたともいえる。／とすれば、われわれ日本人とは、いったいどのような国民であり、民族なのか？

わたしたちは等しく、心情的に帰る場所を持っていた。

「引揚げ者の悲哀」はどこを探してもありはしない。悲哀があったとすれば、朝鮮が植民地であった時代、朝鮮人が帰る場所を失ったという、そのことに比べなければならぬものであった。

わたしたちのなかで見かけられることとして、「引揚者」という言葉が使われている。「植民者」という言葉は、あまり見かけない。あるいは好まれていない。現実には、本来そこにいなければならぬ日本本土に帰ってきただから、引揚者でいいのかもしれない。しかしそこには、わたしたちがかつて「植民地」に一時的に滞在していた、という程度の便宜的な意識が働いている。「否。自分は異郷に骨を埋める覚悟でいた」という反論は当然あるだろう。／略／そういう人にして、なおかつ「引揚者」というならば、話はいっそう危険性を帯びてくるのだ。「引揚げ」させられたという受動的な言葉のなかには、個々の無辜の悲劇がこめられているかもしれないが、やはり相手の民族に対する無視が、心理の底に横たわっている。わたしたちは、歴史的に「植民者」以外の何者でもなかったのだ。

わたしたちは朝鮮を植民地として支配した。そしてそ

の結末において執着しようとしなかった。いったいわたしたち日本人は、どの土地を愛し、惜しんだのであるうか。／略／植民地を奪取するにも、放棄するにも、自国の運命を賭けたあとが、あまりにも希薄だ。本土のみを残して、第二次大戦を終結した日本に、反面からは残酷な自己救済を指摘しないわけにはゆかないのである。／わたしという日本人についていえば、やはりわたしは朝鮮を愛していなかったのだ、というべきであろう。

武司が見た朝鮮は、以上の紹介で、十分に理解できる。奪うだけ奪った日本国家と日本人が、戦後五十年余経て、いまだに日韓、日朝の歴史の清算ができないのは当然かもしれない。

そのⅡ 『遙かなる故郷』の世界—ライとの出会い—  
これは、日本の近代化によって犠牲にされた朝鮮とライとの関係に焦点を絞った本である。  
前書から引き継いだテーマを、武司はあらためて意識化する。

はたして日本の戦後二五年の時は流れたといえるだろうか。朝鮮人にとって、朝鮮は日本に釘づけにされたま

までである。そのように、日本人にとって日本は朝鮮に釘づけにされているか、いないか？／略／日本人は戦後二五年を、こちら側に歩いて来た。朝鮮人は戦後から三六年を、むこうのほう、過去へ戻る。彼らの断ち切られた過去から歴史をつないでくるために、時を逆流する。逆流すればするほど、つなげばつなぐほど、日本の「植民史」に沿って戻らねばならぬ。そのコースと異なるコースを、彼らはどれほど歩いて来たかったことか。／略／そのいみで、朝鮮はわたしのまえにある選択可能な対象ではない。描写可能な対象ではない。朝鮮は、世界でただひとつ、わたしの背後の国と考える。

こういう意識化を持ち抱えた武司にとって、朝鮮で最初に出会ったライ者は、今鮮明によりみがえってくる。一九七八年に発表した「遙かなる故郷—ライ者の文学—」の冒頭はこうだ。

わたしは五〇年まえ植民地であった朝鮮の「京城」、現在のソウル特別市でうまれた。／略／わたしが幼年のころその土地でライと出会った記憶からはじめたい。

—仁丹山とよばれた、山でない山があった。「京城」の中心部、京城駅から一五分ばかり東へ歩いた山の手に

屋敷が建ちはじめ、この丘の周囲が埋められていった。赤土の傾斜面はかなり急勾配で、三〇度ばかりあったろうか。／略／仁丹山。そこで仁丹が穫れるとわたしは信じていたのだが、毎日のように丘に上ったものである。／略／ある日の午後だった。いつまで待っても、奇妙にその日は、友達は誰も現われなかった。ひとり遊びに飽きてわたしは丘を降りた。誰もいない乾いた道に、青坡の山に沈む夕陽がみえた。そしてひとりの巨きな人間がわたしの前に立ちはだかった。／真黒な服を着ていた、と思う。服はてらてらに光っていたことを覚えていた。巨きな人間に道をふさがれて、わたしはそのつもりになれば逃げられるのだが、それが威嚇や悪意でないような気がして、立ちどまつたまま、見上げた。赤い、まるい、まんまるい顔だった。／略／男は一本の指を出した。太く赤い指だった。その指でわたしの頬をさわり、やがて黙ったまま道を開けた。／略／何日か経った。／略／いつものように丘の斜面をすべり降りた。降りたところ、斜面のないふだん寄りつきもしなかった崖のほうを見た。薄い煙りが上がっていた。そうだ…あそこには穴があったな。獣のように人間が住んでいる穴があったな。なぜいまままで近寄りもしなかったのだろうか…。わたしは藪を分けながら煙をあげているその場所に近寄

った。穴の手前に、わたしくらいの子供が二人いた。穴から外へわずか数メートル。二坪ばかりの空地の縁まで出てきて、臆病そうにまた穴の中にひっこんだ。かわりに今度は熊のような巨きな人間が出てきた。赤い顔したあの黒服の男だった。彼は笑った。そして悪意のない表情で私を招いた。／＼はじめてそのとき、なぜだろうか、わたしは悲しくなったのである。そして衝動的に逃げた。／＼やがて小学校に通い、中学生になり、わたしはもう仁丹山の遊びを忘れた。／＼略／＼むかしこの道のはずれの藪の中に、ライ家族が住んでいたというそのことだけは知る年になっていた。あの男と子供たちのことであつた。／＼いま思つても、男が頬を指で触れたのはなぜだったのかはわからない。故意に病気を移そうとしたかと想像をたくましくしても、当時の彼は病気が伝染性のものであることは知らなかつたはずだ。そうではなく、日本人の幼児に対する悪戯だつたのだろうか、とも思う。それも自然ではない。それほど余裕は、追われ隠れて住むライにはない。ただひとつ、想像できることは、誰も人影のない丘の道に一人の大人と一人の幼児が立っていた、それだけの偶然が彼にこのような行為をさせたのではないかということだ。それはライとは無関係に、また被植民者と植民者を問わず、人間一般として想定する

かぎり可能だ。そう考えれば、別の日、彼が穴から出てわたしを招くような恰好をしたのも了解できる。これに思いあたるとき、わたしの胸はうずきを覚える。おそらく、彼の子供たち、遊び場もなく遊び友達もない彼の二人の幼児を思つてわたしを招いたのではなかつたらうか。これらのすべての経緯については、ライとは関係なく考えられる。しかし悪意のないこうした行為に触れて、わたしは咄嗟に恐怖を抱いた。わたしが彼らを異民族としてでもなく人間としてでもなく、「熊の家族」と思つたからだ。ライの意識は、わたしの側にあつたのだ。／＼現在わたしは、ライは感染しにくい病気である、と知つてなお、この日の恐怖をいまも拭い去ることができない。さらにもし、あの日、植民地において幼児期に感染し、一〇年一五年の潜伏期のあとに発病していたならば、という怖れを払いのけることができないのである。ライの友人と交流を重ねながら、あの日もいまも、わたしの側が虚妄を構成し意識する。そこにはなにがあるのだろうか。

長い引用になつたが、武司の問題意識の深さに圧倒される。彼がライ者と交流を深めている意識の底にあるもの、それこそが、日本人と朝鮮人との出会いは可能な

か、という問いであり、それはさらにいえば、国籍と民族を背負いつつ人間と人間との出会いは可能なのかという突き詰めた問いなのだ。

一九四九年に大江満雄を訪問した武司は、満雄から「ライはアジア・アフリカ」だと教えられる。

わたしのまえに、あたらしくないアジアの像がぼんやりと姿を現わした。アジアの解放、植民地解放と同時代を生きて、アジアの持つ古く重たい、象徴的ライがそこに巨大な姿を見せていた。／わたしの記憶の植民地経験のなかに多くの浮浪ライがいた。／略／わたしが植民地において労働者階級に会うことがなく、戦後、日本においてはじめて発見したことで、その位相を同じくして、わたしは、日本に上陸してはじめて日本人ライ者に出会うのである。まさにライの階級性がそこにあった。／略／いまなお植民者であり非ライ者であることの自己認識は、彼らの側からは傲岸、わたしの側からは羞恥にかいかい。

こういう自己認識から彼らの文学に近づき、武司は、ライ文学の総体をつかみ取ろうとしていったのである。

### 第三章 ライ文学の内実

一九六四年から十年近く、群馬県吾妻郡草津にある国立療養所の「楽泉園」のライの詩人、歌人と交流を積み重ねた武司は、ライ文学の内実をまとめるのであるが、「草津の友人たちの文学活動に触れて一〇年をすぎ、／略／彼らの文学、巨大な主題を抱えながらみずからいまだに定型化しようとしなない混沌のなかに、いくつかの鍵の言葉を求めようとするにすぎない」と謙虚な態度を保ちつつづける。武司は、日本のライ文学史をまとめようとしたのではない。すでに朝鮮との関わりで見えてきたように、客観化することにならざるにほどの関心も抱いていない。あくまでも自分とライとの関係を自分の生き方の問題として引き受けている。

では、武司の文章を引用する。

この友人たちの書き綴ったライ文学に、いくつかの要素がある。そのなかで感知したものと四つ挙げてみる。

一は自殺。

二は望郷。

三はボディ・イメージ。



四は全体的回復。

そして、武司は短篇や詩や短歌の例をつぎつぎに挙げて、右の四つの事項について言及していく。

#### そのI ボディ・イメージ

ライの文学者たちは、盲人であったり、身体障害者であったりする。彼らには、身体的欠落のゆえに自分が今いる現実をどう捕らえているのか、という問題があるが、それを武司は十分に捕らえ切っている。つまり、「この場合ボディ・イメージとは、環界に対するわが身心の投影像とでもいえようか」と述べ、すでに故人となった秩父明水という歌人の言葉を紹介している。「幻影を追う生活。それは盲人の人生である。眼というものを持たない盲人は、手に触れるもの、耳に聞くもの、舌で味わうものなど、すべての色彩や形を、自己の知識・経験・記憶などの助けを藉りて探り、その幻影の中に生活を営んでいることはまちがいないと思う」。ここで「幻影」という言葉は、ただし本人にとってのリアリティ（実在）である。じつは晴眼者の私たちも自己の関心によって風景（現実）の一部を切り取っているであって、本質的には両者の相違はないと私は考える。が、ライ者の場合のリアリティ（実在）の描写から、わたしたちは新たな

表現の問題が提出されているのに気づく。武司は、秩父明水の文章を引用したあと、次のように書く。

風景とは見られるために存在するものでなく、そこに生物が生きるためにある。見る、つまり環界を大脳に写像することではなく、環界と自己の生との緊張関係のなかに、生物たとえば人間が自己を発見すること。この場合、盲人ならば暗黒のなかに映るイメージは幻想的であっても緊張的にリアルである。「発病せるわが頬撫でさすり祈りし母漆黒の闇によりみかえる記憶」（沢田五郎）。ここでは過去が記憶という現在形で存在する。

精神科・神経科の領域で用いられる *body image* という術語にちかこの映像世界は、「各人が各々自身について持つ空間像」であるといわれ、

と述べて、精神科医の大橋博司の「幻影肢」についての文章を引用しているが、すでに常識なので省略する。そして、先に指摘したように、武司もまた以下のように指摘する。

そしてこれはライ者のみにとどまるものではない。わたしたちの深い心理、願望にひそんでいる率直な表現論

であるのかもしれない。視覚世界に従属したりアリズム論、イメージ論に対して、問題を投げかけるものとなりうるだろう。

そして、四首の短歌を例として挙げているが、ここまでは二首のみ紹介する。

クロッカスの芽はいでぬかとまさぐれば土の中より

囁ききこゆ

山下初子

けだものの仕草のごとく舌をもて傷を触れみるめし

いのわれは

古川時夫

そして、詩人武司は、結論を記す。

わたしたち暗眼者が文学表現で喪失している実在への探索は、ライ文学において発見できるようだ。

## そのⅡ 望郷について

室生犀星の「ふるさとは遠きにありておもふもの」は、あまりにも有名であるが、事実としての故郷金沢でこの詩は作られている。事実としての故郷を越えて、実在しない故郷を求めているこの詩は、武司の言葉を借りるならば、「当時の詩人が近代自我を獲得する、その目的の

ための反逆であり、／略／『脱郷』であった。しいて望郷というならば、背後への『望郷』であったといっているであろう。武司は、一方、ライ文学における望郷を、

故郷は後方にあるものではない。ライの解放を獲得するまでは「帰ることのできぬ故郷」がひとりひとりの前方に存在する。／略／いまプロミンによるライ治療時代を迎えた。故郷に行こうと思えば行けるのである。ライの解放時代がはじまる。はじまるのだが、時はもうおそすぎた。／略／その間に描き渴望した故郷は、もはやわたしたちがいうところの「望郷」とは言葉は同じでも、同じものではない。

と。一九八六年、「らい予防法」は、廃止されて、現在、故郷の墓に葬られるライ者もわずかながら現れているが、武司の指摘は、基本的には変わっていない。ライ文学に携わる人の中に、仏教徒やキリスト教徒が少なくないのは、おそらくこの問題と無縁ではない。極楽への天国への帰還の希求なのである。

## そのⅢ 自殺と回復について

一九三六年、北条民雄が発表した『いのちの初夜』は、

文壇以外にも衝撃をもたらした。進藤純孝は、「これは癡院という狭い風景の中の文学ではなく、〈生命の究極〉をついて人間の実存にせまり、死の前で裸身となった生命の姿を捉えようとする真摯な追求の文学である」『現代日本文学大辞典』と述べているが、これは従来の一般的評価である。武司も否定しないが、問題点を指摘している。

死の影をひきずりながらこうしてライ文学は出発した。生命の極北を目指したライ文学が、当時の新興文学に与えた畏怖は大きく、文学とは何を求めるのか、が探られはじめた。しかし、一面、深刻・悲惨を表現したライ文学が、科学的にライをどう認識させるか、ライにどう対処するか迫られている折に、ローカルで深刻な文学として読者や評者にうけいれられたことは、社会がライから遠ざかるというマイナスのはたらきを持つおそれもあった。いま当時の深刻さは減じられたとしても、しかし、わたしが知り得た知友のなかで多くの人は言う。「われわれのなかで、一度でも自殺を図らなかつたものはなかつた」。この自殺は、いま彼らが書く文学のなかに、頻度ゼロにちかくかくされたキイワードとして存在する。

少女の日自殺はかりしという君を信じてわれも身の  
上明かす 川島多一

／略／さらにつぎの詩——「女は思い余っていた。そして凝視めた。子供の首に掌を廻し、鬼と化した。『許しておくれ』。少年は恐怖の中で耐えた。そしてその後何度かくりかえされた、母と子の死の遊戯。折重なる失意。だが、どうしてその迷路を抜けだしたのか。いまは微笑さえ浮べて白い繻帯を巻いている」(小林弘明「和解」)／例外なく図つた自殺を、失敗、克服して彼らは生きていく。それをどうして迷路を抜けたか知らない、小林弘明は言う。いま彼らの平均年齢は六〇歳に近い。これから書きつづけても一〇年、長くて一五年だろうか。かくして日本からライは消えるだろう。消えるために、自らが自らを消すために彼らは、このような言葉を残してゆく。それは自分のためではないのかもしれない。自殺と消滅を期してなお、目指すものがある。それはライの回復ではない。すべての、全体的回復である。

武司のこの一文は、一九七八年に発表されているが、それから二〇年経った今、村松武司は亡くなられたが、草津栗生楽泉園では、患者の詩人会「詩話会」は、健在であり、九名(七〇代、八〇代)が毎月詩を発表しつづ

けている。

#### そのIV 非ライ者の回復

冒頭、一九七七年六月の『詩人会議』の新人賞佳作作品、広瀬志津雄の「ハンセン氏病の唄」（あまりにも愚作というよりも逆差別の作品なので、ここには採録しない——森田）をめぐって、武司は、次のように述べている。

ライは「ハンセン氏病の唄」で歌われるようなグロテスクな存在か。この「唄」は、ライの症状を、わずか外部から観察されうる現象面、および常識と錯覚されていた誤認の社会意識において把えられ、患者の悲惨を観察者側からの推察によって、あたかも患者の現実生活であるかのように書かれているにすぎない。このような観察者側の特異な素材選択が、「大胆な表現で」「社会的な課題への積極的取組み」というのならば、旧態依然のリアリズムや社会性文学が泣こうというものだ。このような作品はむしろライを社会的関心から遠く離れた場所で葬ってきた明治政府以来の撲滅政策の側からみれば、もつとも喜ばしい、歓迎すべき作品に一変するのだ。／略／作者はおそらく政治的・社会的諷刺、批判としてこの唄を書いたつもりかもしれない。しかし結果はちょうど逆

にあらわれた。皮相的な現象面をグロテスクに、悲惨に描き、これをまだ認識するにいたらない第三者に対して、現実はこのように凄絶であり、第三者が無知であることの非を鳴らす。進歩的言論のなかには、いくつかこのような傾向が現われる。しかし作者がつねに無創で批判の側に立っているかぎり、それらは字義どおりの保身の文学、保守の報道である。社会への参与とは何の関わりもない。

そして、武司は非ライ者のライへの関わりについて、自分の立場を明確に提示する。

非ライ者がライ者に関わるとき、つねにこのような自滅に終るものなのであるか。わたし自身の問題としてすでにそうである。しかしライ者の側はわれわれに対して、全体的回復を求めている。病み、退廃している非ライ者に対してライ者は回復を求め、われわれが回復しないかぎりライの解放がないことを、彼らの側からつねに呼びかけてくる。

この非ライ者の解放による全体的回復という視点は、あきらかに大江満雄から学んだものである。満雄は、

「ライ者は来者である」という詩的表現でこの思想を語っている。

こうして、武司は患者に向かつて、ある文学講座で次のように語った。題名は、「ライ文学の表現論」である。

「ライ文学の読者は誰なんだ、いったい誰なんだろう？ それはおそらく、皆さんよりもっともつと苦しむ時間、悲しい条件におかれた人々であるにちがいない。その人々が皆さんの文学を必要とするのだろう。だからここで、われわれが非常にむつかしい条件で、例えば口述、点字で、舌読で、何のために文学を作るのかという大きな問いが与えられたとするならば、——それは皆さん、ライ者がすべて絶滅してもなお、依然として残っている、苦しい悲しい目にあっている人々のために書くということだろう。たとえそれが自分の気休め、自分の慰めのために書くものであっても、それは結果的に、他の人々を潤す。もしそうであるならば、たとえばこの場所で作られるライの記録は文学と呼ばれなくてもいい。それは心の医学といふべきものかもしれない。／＼ここは境界である。ライもまた境界の問題という人もいる。ここで書かれる文学はローカルな文学と呼ばれてもいる。しかしローカルであるかないか、それはその問題をとことん

やってみなければわからない。そのつきつめたところを、あと一〇年、一五年の間に、やり通さねばならない。時間は短い、その短い絶滅の日までの間に実現を期さねばならない……」

図式的左翼進歩主義的発想を拒否して、ライの現象面の奥地にある本質を、つねに的確に捉えていく武司であるが、ここでは時間との戦いにやや昂ぶっているように思える。ライ文学の読者の設定は、究極的にはその通りであるが、もつとゆるやかに一般的読者をも考えるべきではなかったろうか。武司自身詩人であり、なぜライの文学に関わったか、については、すでに述べられたとおりである。非ライ者の回復ということは、「病み、退廃」している現在のわれわれ自身の回復なのであり、われわれに存在とは何であるのかをまっすぐに問うてくる文学として重く輝いているのが、ライ文学なのであると私は考える。

武司の想定した二〇年が、今過ぎようとしている。たしかに多くの大切なライ詩人がみまかっていた。が、依然として文学的営為は続いている。彼らは、むしろ自分たちの文学を「ローカル」とは考えていない。が、日本文学史の中に、「ライ文学」という市民権は要求して

いると私は考えている。ライ文学が築き上げてきた内実を非ライ文学者がどう受け止めてきたのか、受け止めていないのかを問うているのだ。

朝鮮とライとの二つを犠牲にして日本近代化が推し進められてきたと考える武司の、日本近代化楯田論が、社会科学的に普遍性を持つか否かは、この中心ではない。が、一般近代化論が見ようとしなかった、あるいは切り捨ててきた重大な問題を、この楯田論が差し出していることは、確実である。

武司は、この二つの関係を語る興味ある一文を書いている。それは、「レプラなる母」（一九七三）という小文である。

かつて詩人の姜舜から質問された言葉を思い出した。

姜舜は客説（カクソリ）の歌を教えた。

「プマ プマ プマ

去年きた カクソリが

今年もきた

去年はつれなかつたけれど

今年はどうする プマ プマ プマ

これはライの物乞いのことらしく、つづけてこう言った。／「あなたは、ムンディ・オモニという言葉の意味

がわかりますか？ これはレプラなる母。そのためにいっそうなつかしく愛すべき祖国のイメージです」。

／略／われわれはかつていちども、このような意味で、血みどろの歴史であるゆえに日本を愛したことはない。レプラなる母は、いなかった。つねに日本は、敗れても日本は、光輝あるイメージを持ちつづけてきた。われわれの仮構とエゴイズムがそれを迎えた。このことがわれわれの眼を曇らせているのではなかったのか。

「引揚げ」という言葉で植民者であった自己を葬ってしまう意識構造、を突いた武司らしい発言である。日本人は、こうして歴史認識を誤ってきた。たとえば愛国という言葉を嫌う現代日本人は、この言葉を遠ざけることによつて愛国とは何かを問うことを放棄し、過去の歴史への責任を回避しつづけ、今なお戦争責任を問われつづける結果を招いているのである。

韓国には、親友のことを「ムンドンイヤ」（ライ野郎）と呼ぶ言い方がある。これも「レプラなる母」という言い方に通じる表現である。悲惨であるゆえに共にあろう、あるいは共にある、ということの表現である。武司は、こうして朝鮮とライとを結ぶ。

#### 第四章 草津の歌人・詩人たちへの武司の発言

すでに略歴で記したように、武司は、草津の歌人・詩人たちの詩集を編集し、解説も引き受けた。それぞれの詩集の内容については、ここでは紹介しないが、ライ文学の表現論にこだわる武司が、どのような発言をしているのかを具体的に見ていく。

##### そのⅠ 盲目の朝鮮人ライ者にとっての言葉・文字

一九二六年朝鮮慶尚南道生まれ、盲目の朝鮮人ライ者・金夏日の第一歌集『無窮花』（一九七二）をめぐって、武司は、ライ者との一致についていろいろと思考している。（金夏日の苛酷な人生の軌跡は、ここでは省略する。―森田）。

戦後まもなくのころ、ライの詩人たちとの交流をすすめてくれたのは詩人の大江満雄であった。多くの作家、詩人たちがライに近づいた。それは同情からでもあったろうか。または現代そのものの病患、文学の問題としてそれに近づいたのでもあろうか。いずれにしても、近づくこちら側に不分明のものが推測された。驕慢もあった。／略／しかし、近づくとはなにか。ライがそこにあることを知るかどうか。／ライ者との一致と

は、わたしの空想にしかすぎぬ。しかし空想によっても動かねばならぬとき、一致とは、けっして、わたしのほうから近づくことではない。／略／一致とは、ライ者がわたしたち非ライ者の市民生活に入り込むこと。こちら側にくるみるとること。それによってしか成就しないのだ。／略／わたしはなぜ、ライに会おうとしたのか。まず第一に、わたしが非ライ者だからだ。彼らはなぜ、わたしの家に来ないか。それは彼らがライ者だからだ。つまり、非ライ者がライ者を訪れることができるのは、非ライ者自身、そのことによつてどこも傷つくことのない、第三者の立場を持つからであろう。かりに、わたしの身内にライ者がいたならば、それをかくすため、わたしはライ園を訪れようとはしないだろう。その日考えたことは、どうどうめぐりにしかすぎず、わたしの中に、新しいものはうまれなかった。もっと、彼らに会わねばならない。

そして、金夏日の短歌、

日本に永住すべく一切の手續きをして心は淋し

を引いたあと、

これらの歌を『無窮花』に記した。幼いころから祖母や母から、この花の美しさを聞かされ、日本に来て、その花が木槿であることを知り、いま失明して眼には見えなくてもようやく触れるその花に、彼は彼の「言葉」を託した。つまり、言葉・文字は、彼にとつて触れることによつて読むべきものであることを知った。そのいみで、日本語で書かれたはじめての歌集に、その花の名を冠したのである。／略／ライへの接近、一致は、非ライ者としての痛烈ないたみを、当然ともなうものである。それ以外、どのような接近があるだろうか？（一九七三年）

## そのⅡ 詩と対象 小林弘明

小林弘明、一九二五年山梨県生まれ、一九四二年栗生楽泉園入園。

武司は、小林の上京した折の体験や詩や盲人たちのいくつかの日常での体験を紹介したあと、リアリズムにおける対象を論じて、旧来の、「民衆」を素材にしてうたった形式的リアリズムを否定し、ライ詩人個々の現実を歌うことがリアリズムであると述べたあと、

無残は百も承知。それが滑稽でないことも論をまたぬ。

この程度の笑いで相手が傷つくのならば、とうの昔に満

身創痕だ。だからといって逆にライをあわれむ言葉が与えられるなら、彼はそれを許し、そしてしずかに拒むのである。他に対してではない、自らに許さないのである。そういう「優しさ」……。／略／ただ小林を含め、ライの多くの詩人や歌人の作品につよい牽引力を感じることに率直に告げなくてはならないだろう。同時に、リアリズム論にライ文学を引用することは正当性を欠くとは思っていない。彼らにはライの文学が存在する。彼らはライが現実だからライを描く。そのことがリアリズムの本旨であろう。それならば、われわれの文学は何を描くか。われわれは果して一般か？ 否。われわれは一般ではない。われわれは非ライ者であるから、非ライの現実を描く。われわれは非朝鮮人であるから非朝鮮人の現実を描く。この場合、ライと一般は異質であるが、ライと非ライは対称である。そして描かれるべき「対象」は同質となる。

こうして、武司は、対称という視点に立って、対象の同質を手にかけることにより、文学的にライ者に接近していくことが可能になっていく。

そのⅢ 盲人詩人・桜井哲夫——近・現代詩の流

れでなく——（一九八四年）



奇妙な副題であるが、武司は明確な視点に立つて付けたのである。まずは、哲夫の詩「真昼の夢」を紹介する。

春の日に

ぺちゃんこのふとんが

まるまる太った

看護助手はかわいたふとんを

力一杯たたいた

かわいたふとんにまあたらしい包布をつけてくれた

枕カバーもつけかえた

シーツをとじる針を運びながら

看護助手は笑う

今夜はきつと私の夢をみるわ

試みに、健常者も詩の口述を試してみたい。盲人はあらかじめ、全体の構想が頭の中になければ、詩は右のように筆記されることは、結果的に起こりえない。詩は、少なくとも模型のように頭の中に存在していなければならぬ。それはわれわれのいう、カオスとか、ポエジイというもののよりも、いっそう具体的なものであるだろう。／略／桜井はこの詩を「真昼の夢」と題した。ふとんを乾してもらおうこの昼のほうが夢で、今夜彼女と会う

はずの夢のほうが現実なのであろうか。桜井は詩によって、夢と現実、死と生の境界に立つてみせる。／略／盲人が、暗黒のなかで詩を口述するとすれば、それは語る、叙述するというよりも、詩をやるという行為だ。彼は日常生活をやるように、詩を行為する。

武司は、多くのライ詩人について言及しているが、このくらいで止めよう。

武司の結論は以下の通りである。

明治の文明開化まで、ライは国事であった。／そして日本の近代化の当初において、ライを切り替えることが国事となった。／われわれの近代は、ライを切り替えたつもりで、はたして何を切り替えたか。／略／日本の近代が捨てようとしたものが（わたしは詩について言っている）、捨てられないでここに存在している。右のように桜井哲夫について語ることは、ひとりの詩人について述べるのではない。やがて滅びようとするライの詩人たちの多くが、このような詩を書いてきた、その主張しようとするものを、わたしが理解してみたかった。その表現論は、たんに文学や芸術ではなく、国事にちかいかからである。

おわりに

詩人・村松武司論を書き上げるためには、武司のもうひとつの真骨頂である彼自身の詩集を丹念に追わなければならぬが、それは今回の課題ではない。朝鮮とライ文学とを結びつけた希有の日本の詩人としての姿を追うことに止めた次第である。ライ詩人たちの表現論は、武司に、日本現代詩を書かないという決意をさせた。そのⅢの奇妙な副題の由来は、ここにある。ふつう武司は、『列島』の詩人とされつつあるが、その定義も言い得ていないだろう。私にとっての村松武司とは、日朝を架橋しようとした非ライ詩人なのである。

参考文献

- ①『海のタリヨン 村松武司著作集』（一九九四年八月二十八日）皓星社
- ②『大江満雄集』（一九九六年七月二十五日）思想の科学社
- ③森田進著『現代詩人の世界―朝鮮・神・土着』（一九八四年四月二十六日）近代文芸社
- ④栗生楽泉園慰安会雑誌『高原』（一九六〇年代―一九九〇年代まで）